

北村小松(きたむら・こまつ)☆常設展示作家

1、北村小松の生涯

<生涯1 幼少年時代から青年時代へ> 0歳～17歳 1901～1918

北村小松の誕生する明治 30 年代半ばは、父北村益にとって多忙多難な時期であった。八戸における後期自由民権派のリーダーであったが、ある事件を契機として国権・国策派に転じ、政財界にも発言力を増すために東奔西走する時期でもあった。

伝統俳諧の復興、はちのへ新聞社の創設の頃でもあり、小松が生まれた時から、身の回りにはこれらの情報や文物が散在しており、その中で幼少年期を過ごしていった。

中でも中学校在学期には自動車や飛行機などの八戸への伝播もあり、自然、文学的なものより機器や工学的な方面に興味を引かれ、飛行機設計者を夢見るようになり、中学校卒業と同時に東京高等工業学校を受験するが失敗。

<生涯2 シネマの旗手として～小説へ> 18歳～35歳 1919～1936

浪人生活ののち、大正8年に慶応義塾大学予科に入学することになり、小山内薫の講義に熱中し私淑。松竹キネマ研究所の研究生となり、一方花柳はるみを介して小山内薫の知遇を得て師事。小山内の指導のもとに戯曲・脚本の創作活動を精力的におこない、戯曲集『猿から貰った柿の種』で高い評価を得、注目を浴びた。

同時に脚本も精力的に書き、続々と映画化されたが、昭和6年8月の日本で最初の本格的トーキー映画「マダムと女房」の脚本で一躍、松竹蒲田映画の旗手として、その名を不動のものにした。蒲田映画の小松 31 作目の作品で、この頃から戯曲・脚本に加えて、小説の執筆が多くなり、小説世界へ転じていった。

<生涯3 戦争と従軍時代> 36歳～44歳 1937～1945

昭和 10 年代に入ると精力的に小説を雑誌・新聞に発表。昭和 13 年には吉川英治・菊池寛らと“海軍部隊”として中国上海～漢口に従軍。昭和 14 年には陸軍省の執筆強制指令で、「燃ゆる大空」「渡洋爆撃隊」を執筆。「燃ゆる大空」は翌

年映画化上演され、爆発的ヒット作品となり、北村小松の文名を不動のものとした。が、著者の意図とは反対のものであった。昭和 15 年には、久米正雄や小林秀雄らと“文芸銃後運動”や“文士航空会”に携わり、昭和 17 年には海軍報道班員として南方諸島に。20 年には九州鹿屋基地に従軍し終戦を迎えた。だがこの間、飛行機や最新鋭のメカニズム、戦時下におけるユーモアやロマンを素材にした作品を精力的に発表した。

<生涯4 闘病と焦燥の戦後～晩年> 45 歳～63 歳 1946～1964

終戦とともに軍部の執筆強制指令で書いた「燃ゆる大空」「渡洋爆撃隊」の2作で、昭和 21 年～25 年まで活動停止追放処分となった。

この頃から持病の心臓病が悪化し、昭和 39 年4月 27 日に没するまで、闘病生活をくりかえした。だが創作活動は旺盛で、小説・戯曲・脚本・随筆に加え、翻訳や児童文学(冒険・SF)などの作品を多数発表。

模型飛行機の設計をした。また、UFO の研究に熱心で「小学三年生」に「空とぶ円ばん」を連載したり、宇宙探検を予測し火星に人類の到着することを予知して、火星の土地分譲予約受付証を発行したりした。

少年に夢を抱かせるユニークな活動でも知られた。小松の影響を受けた作家に石原慎太郎、三島由紀夫、小松左京らがいる。

2、北村小松の代表作

○戯曲集『猿から貰った柿の種』

処女戯曲集であるとともに、初めての単行本である。昭和2年原始社刊。この戯曲集には「仮面劇・猿から貰った柿の種」をはじめ、「セント・ヘレナへ行ったボニー」「人物のある街の風景」「一九一四年の覗き繪」「NECESSITAS・VIS・LIBERTAS」「ステツセル」「借りた室」「古巢」の8作品が収められている。

中でも「仮面劇・猿から貰った柿の種」は、当時の社会状況と人間を鋭く風刺しており、築地小劇場で公演され爆発的な成功をおさめた。青森県でもいち早く淡谷悠蔵や竹内俊吉らによって公演されるなど、大きなブームを呼んだ。

他の作品も、当時の時代状況を反映させた風刺やユーモア、自由やモダンを基調としたものが多く、北村小松の文学的思想の根幹を知る貴重な作品集である。

○原作脚本「マダムと女房」

わが国初の本格的トーキー映画の脚本として書かれたのが「マダムと女房」であった。それまで弁士つきの無声映画であったものが、本格的トーキーの導入によって音声と映画が同調再生することが可能となり、日本映画史の大革新をもたらすものであった。

原作脚本が北村小松、監督五所平之助、出演田中絹代、渡辺篤による映画「マダムと女房」は、同年の人気映画のベスト1位にあげられるほどの人気を得、この作品によって脚本家としての北村小松の名を不動のものにした。

映画も原作脚本も、当時希求されていた都市生活者の日常生活を活写し、全篇がスピードにあふれ、洗練された感覚とユーモアによって描き出されていることで注目された。これによって北村小松の名はハイカラやモダニズムの旗手として位置づけられることになった。

○脚本「燃ゆる大空」

北村小松の脚本といえば、第1番目にあげられるのが「燃ゆる大空」。陸軍省の強制指令で執筆を余儀なくされ、はじめ雑誌「キング」に小説「燃ゆる大空」として昭和14年7月～12月号に連載。

“突如陸軍省から柴野中佐という軍人がやって来た。「航空本部と情報部との共同企画だが、この資料で、大航空映画の脚本を書いて頂きたい……………これはあなたに書いて貰うことに決定してあるのです。必要な資料、見学等は連絡次第、如何様にもします！ただし、秘の所だけは、厳秘に願いたい」一軍機を見せられてその秘を厳秘にしろといわれては、もうしぼられたのも同然である……………”(小説『銀幕』)と後で記しているように、有無をいわせぬ軍部の執筆強制指令であった。だが内容は多くの検閲を受けながらも、最新鋭の機器メカニズムが、大空をかけめぐるといふ、夢と希望を与えることに中心が置かれて執筆された。

○小説『銀幕』

実録小説『銀幕』は、毎日新聞に昭和 30 年 1 月 15 日から連載となり、同年 12 月に東方社から刊行されたもの。

実録長編小説としているが自伝的小説で、北村小松の名は松村啓吉の名で主人公として描かれ、生い立ちから学生時代、青年期～壮年期にいたる生涯は、北村小松の生涯そのものである。北村は「私の処女作と自信作」という小文の中で「何が自信作なのか見当がつかない…私は死ぬ直前に自信作を書くかも知れない。実はそのつもりであるのである…」と記しているが、戦後の晩年にかかれた作品群を検証すると、『銀幕』が自信作であり代表作と見てよいだろう。自伝的作品であるが、この作品の中で欠落している部分や秘話は、昭和 36 年 12 月に刊行の随筆『オーナードライバー』(文芸春秋新社)に断片的に補完されている。

3、北村小松のキーワード

<キーワード1 眠くなったから眠る>

「眠くなったから眠る」という言葉は、心臓病のため満 63 年の生涯を閉じた時の臨終の言葉。家庭においても仕事においても創作活動においても波瀾に富み、内奥に葛藤を抱えながらも、常にハイカラで平凡さを装い、人人に「小松ちゃん」の愛称で親しまれ、家庭内ではマイホーム的で子煩悩であり続けた父親北村小松。

表面的には、厳格で直情的な面を持った父親北村益とは正反対の生涯であった。

眠くなったから～の言葉は子供や孫の成長を見とどけた安堵の眠りなのか、あるいはハイカラや平凡さを装うことの疲れだったのか。

<キーワード2 はまなすが一杯に咲く原>

北村小松は父親や身近な人々について、余りふれることはなかった。生涯を通じて作品や随筆、小文の中には「はまなすが一杯に咲く原の村のはづれだったが……原は昔のままの姿だったが、北に面して、はるばると下北半島を尻屋岬の方までのぞみ黄昏時など茜色の空に遠い恐山の山影が紫に浮ぶのを見る岸辺…」などの表現が数多く見られる。

明治末年～大正末期にかけては、白銀海岸や鮫浦から下北半島を眺望できたかつての八戸海岸の自然美豊かな風景があった。

戦後の作品にはふるさとを題材にしたものや、点描したものが数点見られるが、北村小松が“はまなす”の花や“下北半島”眺望をつづることは、北村流のふるさと回帰でもあった。生涯を通じてふるさと八戸の原風景、自然と風土を愛し続けた一人でもあった。

＜キーワード3 MGはオヤジの位牌＞

幼少時代から自動車や飛行機といった文明の機器、メカニズムに興味を抱いた北村小松。文壇で自動車運転の免許を一番に取得（戦後は二番登録）し、生涯乗りつぶした自動車は、6台以上と言われる。その最後の自動車は、外車でも最高級のMG-TD。

「今のMGは、おやじが亡くなった時、田舎の家を処分した金で買ったのだから、私は今じゃおやじの位牌に乗って走っているようなものですが、ベンツのスポーツカーの千五百万円などという車とは月とスッポンほどのお値段のひらきがありません。」（『オーナードライバー』文芸春秋新社刊、昭和36年）

文明開化以降の西洋知識や利器、機器の摂取に積極的だったのは父北村益以来だが、父益は青年後期にある事件を契機に民権思想から国権・国策思想に転換せざるを得なくなった。その分、長男小松には好きな事に熱中させ、その才能を大きく開花させたのかも知れない。

4、北村小松のゆかりの場所

①北村小松が生まれ育った場所

湊街道、海水浴場（青森県八戸市）

小説集『祖国』（新生堂、昭和17年）の中の「ふるさと」や『銀幕』などに断片的に描かれるふるさとの地。「少年の頃、天気さへよければ毎日の様に…醤油屋の良ちゃんと二人、泳ぎに歩いて行った街道…」は、現在八戸市の中心街から小中野町～湊町～白銀海岸への行程で、白銀海水浴場は明治40年代から開かれた思い出の場所。

②北村小松が華々しい活躍を見せた

松竹蒲田撮影所、キネマの天地(東京都大田区蒲田)

北村小松が戯曲・脚本・小説を精力的に書くことによって、文学的名声をあげていったのは松竹蒲田撮影所脚本部、研究所に在籍してのこと。生涯居住した場所も蒲田撮影所を軸にして、新井宿、南千束も現在の東京大田区内であったことは奇縁でもあろうか。

5、北村小松の関連人物

☆小山内薫(おさない・かおる):文学の師

慶応義塾大学予科入学後、工学に興味を示していた時期でもあったので、授業に身が入らなかったが、小山内薫の授業だけは出席し熱心に聞き入ったと語っている。

花柳はるみと親しくなり、身近に私淑していた小山内薫を紹介され知遇を得て、以来小山内薫が没するまで師事した。

数多くの影響と示唆を受けるとともに、処女戯曲集『猿から貰った柿の種』(昭和2年、原始社)に序文を寄せて「北村小松君は戯曲を書き始めた最初から、既に構図と色彩と力学とを把握してゐた。…若々しい情緒と学生らしいユウマアだった。それは清新そのものだった。…」と評価している。

☆高橋のぶ(たかはし・のぶ):叔母

少年時代文学に興味のなかった北村小松が、唯一記憶の中にあるのは、叔母のぶの膝の上で語って貰った巖谷小波の作品の数々。北村小松は「私の処女作と自信作」という文章の中で「第一に私は文学少年でもなかったし物をかくなどとは思つてはゐなかつた…私にもし文学的な何物かを与えて呉れたものがあるとすれば、それは叔母の膝の上で毎日一冊づつ読んで貰った巖谷小波のおとぎばなしだと今思っている…」と記している。

父北村益の妹、叔母ののぶから語り聞かされたおとぎ話の数々が、自分の文学的素養として無意識的に構築されたことを語っている。

☆北村益(きたむら・ます):父

父親である北村益について余り語ることのなかった北村小松だが、それでも作品の中に断片的に登場する。「啓吉の父親は、小説というものは一切自分に読ませなかったが、それにしても活動写真は文明の発明品だという故でこれを見に行くことはとがめなかった。だから啓吉は田舎の小屋で…もう数百回の活動写真を見ていたか知れない…」(『銀幕』)。小説を読むことに厳しかった父であったが、文明の発明品や、雑誌の購読などには寛容であった父親。小松誕生を前後として八戸地方において、政財界に強い発言力をもつ父親であったが、小松の少年時代における文明の利器に対する興味と関心は、父親の少年～青年期の行跡に裏うちされるものであった。

6、北村小松の資料紹介

○「南海の虹焔の海」

原稿

213mm×341mm(×4枚)

「南海の虹焔の海 99 幼なじみ(九)」とあるが、発表誌紙不詳。

(江差家均氏寄贈)

○「支那街で会った女」

原稿

205mm×330mm(×8枚)

「支那街で会った女」は発表誌紙不詳。横浜市の中華街で出会った女とのアバンチュール。(個人蔵)

○「青い靴」

台本(戯曲)

1954(昭和29)年頃

255mm×180mm

「青い靴 二場」は昭和 29 年 11 月、明治座で上演された。著者自身の書き込みと原稿が綴られているもの。(北村未知子氏寄贈)

7、北村小松年譜

- 1901(明治 34)年…1月4日、八戸南部藩の士族の長男として八戸町長横町に生まれる。
- 1919(大正 8)年…4月、慶応義塾大学予科入学。東京日日新聞脚本募集で「民雄さん」三等入選。
- 1920(大正 9)年…松竹キネマ研究所の脚本部研究生となり、小山内薫に師事。
- 1922(大正 11)年…帝劇 10 周年記念の新劇脚本募集に「借りた室」入選。戯曲家になる自信を得る。
- 1924(大正 13)年…慶応義塾大学英文科卒業。松竹キネマ蒲田研究所脚本部に入社。4月、杉本ツネ(のち洋子と改名)と結婚。
- 1926(大正 15/昭和元)年…シナリオ多数執筆。築地小劇場で上演された「人物のゐる街の風景」で、芸術的成功をおさめる。
- 1927(昭和 2)年…『猿から貰った柿の種』刊行。戯曲家としての地位を確立。戯曲集『提琴弾きと喇叭吹き』(昭和 3 年)
- 1930(昭和 5)年…上映作品相次ぎ、映画界における時代の寵児と評される。『北村小松シナリオ集』
- 1931(昭和 6)年…日本初のトーキー映画「マダムと女房」のシナリオを書く。いくつかの新聞に連載小説を掲載。翌年 4 月、妻洋子死去。『肥料と花』(昭和 7 年)『情炎の都市』(昭和 9 年)
- 1935(昭和 10)年…旺盛な執筆活動続く。この頃から小説を中心に筆をとる。『望空夜話』
- 1938(昭和 13)年…文士として従軍。
- 1939(昭和 14)年…一世を風靡した「燃ゆる大空」を雑誌連載。翌年、映画化。「渡洋爆撃隊」を「東京日日新聞」に連載。
- 1942(昭和 17)年…海軍報道班員として南方に従軍。帰還後、「基地」連載。『祖国』『見えぬ閃光』『火』

- 1945(昭和 20)年・・・特攻隊付報道班員として九州鹿屋基地に従軍、終戦。戦後
パージとなる。
『処女航路』(昭和 21 年)
- 1950(昭和 25)年・・・追放解除。
- 1951(昭和 26)年・・・4月、父死去。
『糞坊主』(昭和 27 年)
- 1953(昭和 28)年・・・『現代ユーモア文学全集・北村小松集』刊行。
『街頭連絡・髭の松さん』
『幸福は虹の色』(昭和 29 年)
『タバコ・ロード』(翻訳 昭和 29 年)
- 1955(昭和 30)年・・・6月、「空は蒼いが」を新派で上演。
『哀愁の書』(昭和 31 年)
『オーナードライバー』(昭和 36 年)
- 1964(昭和 39)年・・・4月 27 日、心臓病のため東京の荻窪病院にて満 63 歳で死
去。